

# 台風21号の猛威で関西空港ダウン

日本科学者会議大阪支部代表幹事 岩本智之

## 1. 「想定外」の高潮で空港島冠水

9月4日に四国、近畿に上陸した台風21号は猛威をふるい、関西国際空港(KIX、以後「関空」)で最大瞬間風速58.1m/秒を観測し、大阪市では第二室戸台風(1961)を上回って、329cmの高潮が発生しました。

今回の台風被害について全国的に注目を集めたのは、関空のマヒです。高潮によって、A滑走路が浸水し、飛行機の発着が出来なくなり、空港ビル地下室に設置された機器も損傷しました。こうして国際線、国内線ともに欠航が相次ぎました。

こうなると例によって、“想定外の災害”みたいな弁明が聞こえてきそうですが、そんな言い訳は通用しません。関空の建設に先だって実施された環境アセスメントがどうであったか、今こそしっかりと見ておく必要があります。

この海域の水深はおよそ20m。その海底に続く沖積層と呼ばれる地層はたいへん軟弱です。こんな所を埋め立てても土砂の重みで圧密によって沈下します。工事に先立って、直径40cm、長さ20m程の砂杭を100万本打ち込んで安定化を図ってきましたが、それでも不十分なことは分かっていました。さらに深い洪積層もやはり沈下しつつあります。「豆腐の上の金塊」と揶揄されたゆえんです。

当時、日本科学者会議では関連地域住民、労働者と協力して「空港問題合同研究会」を結成し、新空港の環境アセスメント、地域開発の問題点を解明し、府民に訴えてきました。残念ながら私たちの警告があたってしまった、といわざるをえません。

過去の高潮や高波の教訓として開港後も浸水しないように、せっせと護岸をかさ上げしてきました。関空側としては、高波の想定が低かった、と反省してか、その見直しをはかるとしています。それでも限度はあります。

しかも困ったことに、埋め立て造成した地盤の上に空港ビルを建てると負荷が不均等になり、「不等沈下」によってビルが傾き、ひび割れを生じてきました。そこで各所をジャッキで持ち上げ、鉄板を打ち込んでバランスを保ってきました自家発電機が地下に設置されていたのは、福島第一原発事故の教訓をも顧みていなかったと言うべきでしょう。

## 2. 連絡橋にタンカーが激突

空港と泉州を連絡するのに、道路専用橋と鉄道橋の二重構造の橋が建設されました。この橋に事もあろうに航空燃料を運ぶタンカーが暴風にあおられて激突し道路も鉄道も通行できなくなってしまったのが今回の事故です。泣き面にハチです。

もともと関空を含む大阪湾南部は、大阪港などに出入りする大型船にとって、強風時の避泊海域であり、空港建設に際して海運関係者から懸念が表明されてい

ました。

台風接近時には停泊中の大型船は港外に出て、必要な間隔を保って錨を下ろします。このときたいへん恐れられているのが、強風にあおられて錨を引きずったまま漂流する「走錨」とよばれる状態です。1954年の15号台風が北海道に接近したとき当時の青函連絡船洞爺丸が沈没し、1155人が亡くなりました。今回同じような事故発生したのです。

### 3. 関西経済に甚大な影響・・・でも

関西一円に災害が広がり、多くの人たちが窮地に陥っている中、大阪府の松井知事サンは沖縄に出かけていました。新基地容認の知事候補の応援のため、地元維新の引き締めを駆けつけたそうです。乗客、乗員、空港関係労働者など12,000人が孤立しているのを尻目に中部空港から発ったとか。

そういえば西日本を中心に未曾有の大水害の危機が迫っていた7月5日、アベさんはお友だち数十人を集めて、「赤坂自民亭」と称して飲み会を開いていました。こんな人たちの辞書には「危機管理」の語彙は存在しないみたいです。たぶん、総裁選に向けて仲間の結束固めに躍起となっていたのでしょう。

こんな人たちが、なりふり構わず、2025年万国博誘致とカジノづくりに奔走される姿を見ていると、大阪府民始め国民の安全と幸せをどう考えているのか、暗澹たる気持ちになります。

